

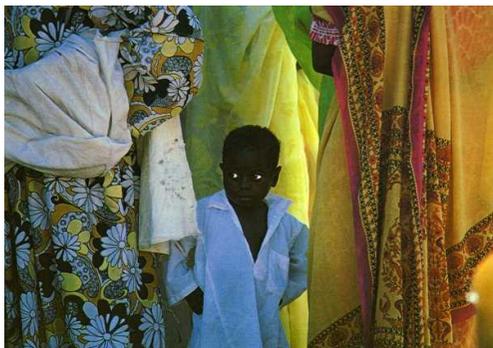
アフリカの子供達（松本洋写真帖；河出書房新社より抜粋）

私は、長年国際開発協力に関連する仕事の関係で数多くの途上国を訪問することが出来た。当時はデジタルカメラがない時代だったので、その時々に出会った途上国の人々とその生活をカラースライドに撮って保管してきた。感光スピードは遅いが色彩の切れの良いコダクローム A3A25 を採用した。1990 年代初めに、これらは膨大な数に上ったので、いったんアルバムに整理して多くの人たちにも見てもらうことにした。そうして出来たのが「半地球：松本洋写真帖」である。（河出書房新社、1992 年 2 月 20 日）その「はじめに」にアルバム作成の趣旨を以下のように記述した。

「南の国の人々と関りが出来てから四半世紀が過ぎた。その間に訪ねた途上国が 50 カ国を超え、撮ったスライドも 20,000 枚以上に及んだ。その中から 80 枚を選び、電気紙芝居と称していろいろな人に見てもらってきた。松本節で語りも付けた。この電気紙芝居は、我が国の技術協力を実施している国際協力事業団の派遣専門家のために、月 1 回 5 年間続けたし、母校早稲田をはじめ、いろいろな大学の特別講義でも進んでやらせてもらった。。。。こうしてその回数も 200 回に近づいた。この紙芝居を通じて、見る人に伝えたいメッセージは何だったのか？

何よりも南の国の人々が、たとえ物質的に恵まれなくとも、楽しく精一杯生きる日々の姿をそのまま伝えたい。表面的に見る日常生活の様子は確かに貧しいけれど、生き生きとした表情、キラキラした目、それは、「ドッコイ南は生きている」といった感じだった。そこに惹かれた。私は日本の ODA、援助によるプロジェクトの写真よりは、その国の人々の生活表情といったものを撮り続けた。もちろん最大の関心事は「開発」という概念の究明だった。。。その開発がその地域の人々に役立っているのか、いろいろな評価時点、様々な評価者の立場によっても変わる。「開発」の評価は、時間的要素を入れて初めて実態把握に近づくのではあるまいか。。。。南側の人々の内からなるメッセージを、若い人々が感じとってくれば存外の幸せである」

その時から、すでに 20 年が経過した。写真に撮った人たちは、その後、「開発」の恩恵を得ているだろうか。あの時の子供達はすっかり大人になって、自立していることを願うばかりである。以下のアルバムは、写真帖の中にあつた「アフリカの子供達」を選んだものである。今でも多くのアフリカの子供達が元気に、生き生きとした表情、キラキラした目を持って生きているだろう。



親たちのおしゃべりの谷間で、スーダン（1977 年）村の楽しい我が家、象牙海岸（1986 年）

踏み切り近くのキオスク、ナイジェリア（1977 年）



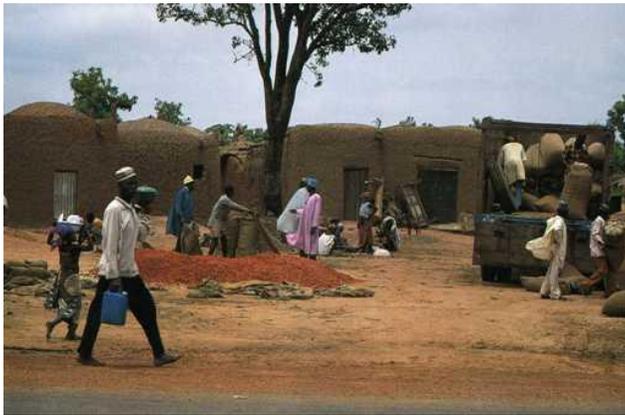
村道にて、象牙海岸（1986年）



日系シャツ工場の女工さん、ウガンダ（1973年）



洗濯男で溢れる川、象牙海岸（1986年）



村の共同出荷風景、ナイジェリア（1977年）



パイナップル畑のランチタイム、ケニア
（1986年）



針金を使う髪結さん、カメルーン
（1977年）